

# 私の京都新聞評

土居 好江



あなたは今の京都の景観をどう思いますか。4月19日朝刊1面の「京都市 景観政策見直し」の記事で、高さ制限が地域別になると報道されました。風土工学の故・佐々木綱先生(京都大教授)は常々、「景観十年、風景百年、風土千年」とおっしゃっていましたが、このままでは、京都の美しい景観はなくなるのではないかと案じています。今、京都のまちを見ると、山も見えなくなるほど、ビルが林立してきています。景観の大きな転換

期はいつだったのでしょうか。バブルの時でした。「ビルを建てるのが先進的で、京都が発展すると思っていた」と、何人もの町家所有者からお聞きしました。近年、観光で訪れたドイツ人に尋ねられました。「どうして京都の景観は一貫性がないのか」と。「戦後の急速な高度経済成長で、法律の成立より前に開発が進んでしまった」とは、京都の観光にも関わる米国人の友人の指摘。私は苦笑いしながら頷きました。

平安時代の太政官符には「御所を見下ろす場所に家を建ててはいけない」とありました。人々の心の拠り所として暗黙のうちに受け継がれてきました。ロンドンではセントポール大聖堂をどこからでも見えるように、1938年に高さ制限を実施しました。都市や人にとって何が大切なのかという意志がはつきり読み取れます。日本には月見町や月見ヶ丘町というように月と名づけた地名が各地に残ります。桂離宮の古書院の設けも、月見台から中秋の名月が

「平安時代の太政官符には「御所を見下ろす場所に家を建ててはいけない」とありました。人々の心の拠り所として暗黙のうちに受け継がれてきました。ロンドンではセントポール大聖堂をどこからでも見えるように、1938年に高さ制限を実施しました。都市や人にとって何が大切なのかという意志がはつきり読み取れます。日本には月見町や月見ヶ丘町というように月と名づけた地名が各地に残ります。桂離宮の古書院の設けも、月見台から中秋の名月が

## 京の景観議論深掘りを

真正面に見えるようになっていきます。加えて離宮内の茶室は四季折々の月を、真正面に仰げるように設計され、暮らしの中で月と楽しんだことを物語ります。江戸時代までの暦は月の満ち欠けによる陰暦。空に浮かぶ月に想いを託した俳句や和歌が沢山遺され、月の存在の大きさが分かります。

4月17日朝刊のオピニオン・解説面(13面)の「取材ノート」欄に北川浩猛記者は「(景観政策)見直しの焦点は、景観保全と都市の持続的発展の間」にどのよう折

今後、伝統的な町家や文化的な空間の継承をどのように行っていくのか。また何を基軸にしていくのか。住民、訪問客のいずれもが癒され、楽しめる空間・景観を形作っていくには何が必要か。京都新聞さんには、市民の参考になるよう、他府県や海外の事例を紹介して頂くとともに、新しい感性に基づいたアイデアをどんどん出してほしいです。

(京すずめ文化観光研究所理事長) 土居さんの評は今回で終わります。